

Margaret Atwood のフィクションにおける “Life narrative”

The Handmaid's Tale と *The Testaments* を中心に

平林美都子

Leigh Gilmore や Max Saunders はライフ・ライティング (ナラティブ) が近年、文学ジャンルあるいは手法として重要性を増してきたことを指摘している。ソーンダーズは「どんな自伝的語りもパフォーマンス的な主体となる」(Smith 1995, 17)と語る Sidonie Smith の理論を基に、分析方法としてのパフォーマンスティヴィティの機能へも関心を向けている。本発表では Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* (1985) と *The Testaments* (2019) を取り上げ、とくにリディア小母の手記におけるパフォーマンス的な機能を考察した。

The Handmaid's Tale と *The Testaments* の語りがいずれも聴き手または読者を想定している点は注目すべきである。アグネスとニコールの語りは「目撃証言」であるため聴き手が存在するし、オヴフレッドとリディアも常に架空の聴き手・読者へ呼びかけている。つまり彼女らの語りは「マニフェスト」(Smith 1993, 156-7) というパフォーマンス的な側面を持っているといえよう。彼女たちの語りですらに重要な点は、個人レベルの告白に留まっていないということである。オヴフレッドの語りはギレアデ国家の公式の理想像を打ち破り、リディア、アグネス、ニコールも国家の暗部を暴き出し、女性の結束によってギレアデ政権を崩壊に導いていたことが描かれている。まさに私的な女性の語り (=herstory) がギレアデの歴史となっていくのである。

The Handmaid's Tale はアトウッドによって「証言文学の伝統」(*New York Times*, March 10, 2017) に位置づけられているように、オヴフレッドの物語の中心にあるのは、夫と娘との強制的別離というトラウマ的体験である。彼女の語りは現在の状況と過去の回想とから成り立っている。通常の過去形の語りでは出来事が終息しており事実として定着しているが、オヴフレッドの過去形においては夫・娘の生死や所在など確定していない。また現在形を使用する語りは未来への潜在的可能性が存在するはずだが、侍女の役割に縛られた彼女の場合、先を見通すことができない。「オヴフレッド」という呼称はアルチュセールの言う「呼びかけ」機能によって、侍女としてのアイデンティティを示しているが、パフォーマンスに侍女を演じつつも、現在と過去を往来する語りの言説はそれを裏切っているのである。

アグネスとニコールの証言というマニフェストは、「圧政的なアイデンティティ・パフォーマンスに介入し、文化的に正当だとされたシナリオを混乱させる」(Smith 1993, 160) という意味では、パフォーマンスであると言えるのかもしれない。しかし、スパイと冒険の要素を織り込んだ二人の証言は任務遂行後に語られていることが最初から明らかであり、こうした因果関係を説明する語りでは、主体は持続した一貫性を持つ印象を与えられてしまっている。二人の語りのもう一つの特徴は、「起源 (母) 探し」のストーリーが含まれているという点である。出版直後、*The Handmaid's Tale* と比較した手厳しい書評が続いたのは、二人の「プロット優先」の語りが原因であろう。ただし、Brian Bethune とのインタビューからわかるように、アトウッドが続編を執筆した目的は「いかに崩壊したのか」という因果関係を示すことだった点は無視できない。

パフォーマンス的なアイデンティティをすり抜けるオヴフレッド、因果律のプロットに制約されたアグネスとニコールに対し、リディア小母の語りからは三つのリディア像が見えてくる。彼女の手稿の特徴は、語る私 (書く私) とその対象となる私の分裂、言い換えれば語っている自分に意識的であるということである。まずリディアの手稿の冒頭にはギレアデで確立した正統なる第一のリディア像としての石像が描写されている。同様の厳格なリディア像は教室の後ろの「額」に飾られ、国家の道徳規範として子どもには脅威となる「伝説」的存在ともなっている。しかし、手記ではこの正統なリディア像を壊し、「無定形で、つねに形を変え...司令官たちの心にさえ動揺の影を投げかける」(*The Testaments* 32) 別のリディア像を見せていく。

第二のリディア像の書き手は筆記するパフォーマンスを強調し、自らを「記録天使」あるいはギレアデの「ゴシップ・ディーラー」(277) と描写する。そして「くしゃくしゃにされた紙屑」(172) となった手記である自分を想像する。つまり書き手は記録者であると同時に手記そのものとしても自己認識をし、手記としての存在を読者に依存しているのだ。手記は「選択の余地のなかった自分の人生」(36) を弁明し、罪深さをさらけ出すことで「公認されたフィクションを混乱させ」(Smith 1993, 160)、石像イメージを壊していくのである。

第三は情報収集者としてのリディア像である。彼女がギレアデ発足時の屈辱的体験からジャド司令官に深い恨みを持っていること、創設期の四人の幹部の小母たちのボスになろうとすることは、手記の前半に克明に描かれている。ジャドへの報告は省略したり憶測や虚偽を混ぜたりするなど二枚舌を使い、集音マイクやカメラを各所に設置して、小母たちの会話や行動を盗み聞き・盗み見する。さらには自分の監督下の真珠女子に報告

の他言を禁じることで、重要な情報を集約して管理するのである。手記の中間点となる 11 章、13 章、15 章では有能な情報収集者であり、手記の中でもほのめかしにとどめるだけの狡猾な情報操作者であるリディアのパフォーマティブな側面が浮かび上がってくる。一見脈絡のないような情報—エリザベスに対するヴィダラの虚偽の告発、グローヴ歯科医の小児性愛癖—は、リディアにおいてエリートの粛清に繋げる一つのプロットに仕立て上げられていく。まずエリザベスにヴィダラがでっちあげた告発を伝え、ヴィダラへの不信感を植え付け、自分に対する「感謝の念」を勝ち得たのち、エリザベスに依頼—グローヴ歯科医にレイプされそうになるという演技と偽証—をしたのである。彼はその後「集団処置」で処刑された。リディアの情報操作によるプロット展開はさらに続く。昏睡状態のヴィダラが一瞬目を覚ましたとき、陰謀の犯人としてエリザベスが名指しされたことと嘘をつき、さらに有能な歯科医の告発により世間から不信感を抱かれていることも付け加え、エリザベスの不安と恐怖心を煽り、最終的には暗示めいた言葉によって、ヴィダラ殺害を教唆するのである。このように、リディアの情報操作は、グローヴとヴィダラの死のみならず、エリザベスの失墜までもたらす可能性がある。このリディアは必ずしも「女性」の味方というわけではないのだ。

これらの三つのリディア像に加え、*The Testaments*にはもう一つのリディア像をアグネスとニコールの証言において確認することができる。アグネスに小母となる道筋を暗に教えたこと、秘かに犯罪ファイルを読ませ、ギレアデ国内の腐敗状態を熟知させたこと、カナダの秘密組織に内部情報を流していたこと、ニコールとアグネスに情報流出のミッションを託したことなど、二人の証言から浮かび上がってくるのは、ギレアデ崩壊のためにリディアが長年にわたって一人で秘かに行動をしていたということである。それは「歴史的背景に関する注釈」の最後に言及される真珠女子の彫像へと繋がっていく。アグネス、ニコールによってベッカのために建立されたという彫像の銘文には A・L と記してリディア小母を称える言葉も入っており、ギレアデを崩壊に導いた女の結末を物語っている。二人にとってのリディア像は、嘘偽りがなく厳しいけれども慈愛に満ち、女・子どもの側に立って行動する英雄なのである。

ただし、ギレアデ崩壊の目論見が手記からすべて隠されていたわけではない。石像建立の 9 年前を想起するところから始まる手記からは、アグネスとベッカを真珠女子にする計画が 9 年前に出来上がっていたという、彼女の遠大な企てが徐々に浮かび上がってくる。とはいえ、犯罪ファイルの収集は義憤からではなく復讐を基にした企てであり、自分の生存のための行為であった。手記の暴露の断念すら考えていたリディアは、女性の結末のために生命をかけたという英雄的アイデンティティの美談ではなく、復讐心と自己保全の間で揺れ動いているリディアの姿を生成していったのである。

オヴフレッドは自分があたかも二次元の存在であるかのように表現しているが、リディアは自らが文脈を作り、その文脈の中でパフォーマティブに自己を生成していく。つまり、二次元のオヴフレッドに対してリディアは立体的な存在である。*The Testaments* のリディアの手記は 'holograph' と称されている。これはホログラムの意味もあり、立体画像を記録した三次元の像の再生の意味がある。編者の意図に関わらず、この名称そのものが立体的なリディアの存在をパフォーマティブに証しているのである。

ライフ・ナラティヴが一貫した矛盾のない自分を描くことなどはできない。アグネスとニコールの証言から見えてくるのは、リディアが描けなかった、あるいは自己認知しなかった補足的なもう一つのリディア像である。対人的関係から浮かんでくるこのリディア像はある意味、他者による伝記の役割を果たしていると考えられる。それはライフ・ナラティヴという自伝の限界を示すと同時に、ライフ・ナラティヴを開かれたものにすることによって、*The Testaments* が決してプロットを重視するだけのフィクションではなく、自己語りのパフォーマティブな働きによる語りの妙技をみせてくれる文学テキストであることを証明しているのである。

Atwood, Margaret. *The Handmaid's Tale*. Fawcett Crest, 1985.

----- *The Testaments*. Vintage, 2019.

Bethune, Brian, "Margaret Atwood's urgent new tale of Gilead," *Maclean's Magazine*, 6 September, 2019.

Gilmore, Leigh. *The Limits of Autobiography: Trauma and Testimony*. Cornell UP, 2001.

Saunders, Max. *Self Impression: Life-Writing, Autobiografiction, & the Forms of Modern Literature*, Oxford UP, 2010.

Smith, Sidonie. *Subjectivity, Identity, and the Body: Women's Autobiographical Practices in the Twentieth Century*. Indiana UP, 1993.

----- "Performativity, Autobiographical Practice, Resistance." *a/b: Auto / Biography Studies*, vol. 10, no.1, 1995, pp.17-33.